

HIRATSUKA CITY LIBRARY

(<http://www.city.hiratsuka.kanagawa.jp/library/>)

き い ふ

2002年6月

第51号



とくのうか 篤農家・木島才次郎(1872 1933)

キュウリ栽培のパイオニア



昭和47年(1972)平塚市高根に一基の碑が建立された。この碑は、明治末期に旭地区でキュウリ栽培の研究に心血をそそぎ、その一大生産地へと導いた篤農家・木島才次郎氏の業績について刻まれたものである。その碑文は、以下のように書かれている。

功績不朽

木島才次郎氏彰徳碑

平塚市長 加藤一太郎篆額

木島氏は明治五年高根村に生まれ、若い頃から農業の改良に思いをいたし、常に指導的人物として信任されていた。この地は胡瓜の栽培適地として知られていたが園芸作物に共通した病虫害率の高い悩みがあった。ここに氏はその予防について多年研究をかさね、ボルドー液撒布による対策に成功したので、その使用を奨励し、漸く多量生産に確信を得ることができた。よって同志と相図り、明治四十一年、生産組合朝陽社を結成し、販路を京浜市場に開拓した。ついで大正二年中郡青物連組合を設立して着々事業を拡大し、青森県の林檎組合、静岡県 of 梨組合とともに全国三大生産組合の一として当時の農商務省からしばしば表彰され、模範組合として広く知られるに至った。昭和八年二月、氏が長逝されると遺徳を讃える人々が第一周忌にあたって見事な胸像を建て功績を不朽とした。しかるに太平洋戦争中金属回収の為に像を供出してしまったので、このたび有志相寄り、氏の生誕百周年を記念して碑を建立し、産業功労者の芳躅を永く後世に伝えんとするものである。

昭和四十七年二月十一日

平塚市議会議長 小川房吉撰

同副議長 水島英耀書



明治末から戦後にかけて旭地区で最も重要な農作物は、キュウリであった。旭で最初にキュウリを栽培したのは、山下の久保田辰五郎氏であり、氏は幕末の嘉永年間に高座郡より種子を入手して試作したが、一般の口には合わなかった。明治30年(1897)頃になると山下に12~13人のキュウリ栽培者がみられた。さらに、明治40年(1907)頃高根の篤農家・木島才次郎氏が、本格的に栽培着手した。木島氏は、明治5年(1872)8月15日木島藤七の長男として高根村にて誕生。高根は、キュウリ栽培の適地で、キュウリは半促成で冬期(1月下旬~2月上旬)に「モトドコ」といわれる苗床をつくり、横3尺(0.9m)縦5尺(1.5m)の油障子(油紙を貼った障子)の大

きさが基準となり、ここに種子をまく。「トコ」は、まわりに杭をうって竹をわたし、ワラでかこった長方形のもので、この中には、一番下にワラを入れてその上に落ち葉をのせる。これらを交互に入れて、水と糠を振って発酵させ、その熱を利用して発芽させ、苗を育てて、暖かくなった4月中・下旬に畑に定植した。このキュウリは、相模半白胡瓜の名で味は最高であったが、病害虫に弱かった。このため木島氏は、この欠点をボルドー液撒布により克服した。

当時、氏は中郡役所に在職していた佐藤頼光技師と共にボルドー液の調製法を研究していたが、草創期のため溶かすのにも大変苦労した。また、農民達は、「キュウリを枯らしてしまうのではないかと心配し、氏のすすめにも応じようとしなかった。氏は、「もし枯れたなら弁償するから」といって農民達を説き伏せボルドー液撒布を同意させたといわれている。そして、いつもの年なら6月になると病気が出るのに今年は勢いよく生育し、みずみずしいキュウリが長期間収穫できたので、翌年より誰もが進んでボルドー液を撒布するようになったといわれている。



朝陽社記念写真「平塚市史民俗調査報告書」5 旭より

木島氏は、明治41年(1908)に生産組合「朝陽社」を設立し大正2年(1913)には、近隣地域を含めた中郡青物連合組合を設立した。この組合は、青森県の林檎組合、静岡県の梨組合と共に日本三大組合の一つに数えられた。「朝陽社」は、現在の平塚市山下1番地(彰徳碑の斜め前)にあって、ここに朝もぎとったキュウリが集められ、共同選果し、ヤサイカゴに入れて東京市場へ出荷した。このキュウリが東京で名声を得たのは、共同選果で信用されたためだといわれている。各農家では、キュウリの大きさを松、竹、梅の等級に分け、目方で伝票を切って出荷した。

中郡青物連合組合になってからは、この組合のことを通称中(マルナカ)といわれ、東京の新橋に事務所をもち貨車で新橋へ送り市場へ出した。この当時マルナカという名が売れており、キュウリをつめたカゴにも中とつけて出した。

共同出荷は、5月中旬から始まり各部落に出荷場をつくり、ここへ集めて馬や荷車で大磯か平塚駅へ運び、貨車に積み込んだ。運賃は、組合で支払い、キュウリをつめるヤサイカゴも組合で籠屋に一括注文した。ヤサイカゴには、麦ワラ、新聞紙などを敷いてこの上へキュウリをつめ麦ワラで蓋をして縄でからげて出荷した。1カゴには、約350本入り、中にテイタを入れて出し、市場でテイタに値が書かれ、これが組合に伝票としてまわって精算した。



山下朝陽社前に建っていた木島才次郎氏の胸像
(須藤次郎氏作)

「新平塚風土記稿 高瀬 慎吾/著」 335 頁より

キュウリをつめたカゴは問屋から再び戻されて使うが、これは後には木箱となり、板で各農家へ送られ、夜なべに組み立てた。

木島氏は、昭和8年(1933)2月11日逝去されたが、その功績を讃えた人達が相謀り一周忌にあたって見事な胸像を建て、その台石に趣旨を詳しく刻んだが、太平洋戦争中に金属回収のため、供出されその姿を消してしまった。その後、氏の生誕100年を記念して昭和47年(1972)に前記彰徳碑が建立された。

(参考文献)

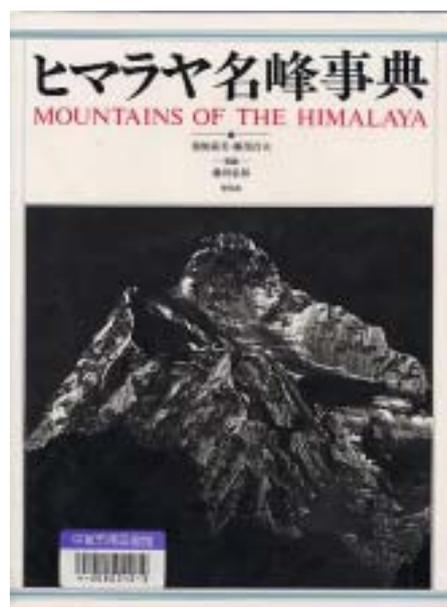
「平塚市史民俗調査報告書」5 旭	平塚市博物館	1986年
「ふるさとの歩み」 真道 永次 / 著	旭村	1954年
「平塚の人と自然と」	平塚市郷土文化研究会	1962年
「新平塚風土記稿」 高瀬 慎吾 / 著	平塚市教育委員会	1970年
「図説平塚の歴史」下巻	郷土出版社	1994年
「90年前、旭村に図書館あり」	平塚市西図書館	2000年

おすすめの本

『ヒマラヤ名峰事典』

薬師義美・雁部貞夫 / 編 藤田弘基 / 写真 平凡社

古代中国からロ - マへの道、シルクロ - ドは知られているが、大ヒマラヤ山脈を利用して南のインドへ通じる道もあつた。東西3500キロにも及ぶ山脈である。中国人は大雪山、トルコ人はムスターク、インド人はヒマラーヤと畏敬の念をこめてよんだ。今日ヒマラヤへの登山者は何千、何万という単位で増加している。ヒマラヤへの豊かな知識を得ることのできる事典である。



『おびどめ』

- 伝えたい日本の美しいもの -

貴道裕子 / 著

スーパーエディション

和服の帯の中央、全身の中心に

きらり輝く帯留のコレクション集です。

金属工芸の彫金、象牙、珊瑚、陶、宝玉、玉飾、から貝やセルロイドまで。

華やかで粋なおしゃれ心一杯の帯留が写真で紹介されています。

身にまとった女性のおしゃれ心を感じとってください。

ありがとうございました。 寄贈図書のご案内

画材&ギャラリーOCT様より次の資料をご寄贈いただきました。

資料名	出版社
小泉清画集	恒文社版
香月泰男画文集<私の地球>	求龍堂
千葉政助ギリシャ神話作品集	(株)中教
フリーランス おおた慶文画集	(株)ムービック
高塚省吾パステル画	芸術新聞社
智内兄助画集	求龍堂グラフィックス
エルンスト 作品と生涯	講談社
モダンアートの魅力	同朋舎
UKIYO YOSHITOMO NARA	リトルモア
バルテュス バルテュス芸術のすべて	岩崎美術社
有元利夫全作品 1973~1984	新潮社版
イシイタカシの世界 南スペインの光と風と	講談社
アンティークポーセリンに学ぶ	文化出版編

「花水川河畔の場」

「花水川河畔の場」と聴いて、すぐわかる方は、相当な歌舞伎通の方にちがいません。けれども、「問われて名乗るもおこがましいが」というせりふをご存知の方は、たくさんいらっしゃるでしょう。「花水川河畔の場」は、そのせりふが出てくる場です。

今年新春の国立劇場では、この「花水川河畔の場」がある『小春穂沖津白浪』が、初演以来138年ぶりに通し上演されました。

この『小春穂沖津白浪』（こはるなぎおきつしらなみ）-小狐礼三-は、元治元年に初演された河竹黙阿弥の作品で、お家騒動、大盗賊、若い美男子、妖艶な女がからみ、籠脱けという魔術も使われる「花水川河畔の場」は、その三幕目・第三場です。

舞台後ろに、花水橋を大きく描き、町屋の灯りを見せた書割です。小狐礼三と日本駄右衛門、船玉おオの三人が、兄弟の契りを結びます。

冒頭の名せりふは、日本駄右衛門の「問われて名乗るもおこがましいが、俺も他生の遠州生まれ」という自分を語る七五調のせりふです。芝居はこの後、「大詰「稲村ヶ崎の場」へと移ってゆきます。

138年前に芝居の舞台となった花水川は、今日も平塚の街を流れています。

雑誌「演劇界」14年3月号（中央館所蔵）に、劇評と『小春穂沖津白浪』詳解が掲載されていますので、ご覧ください。

また、河竹黙阿弥の原作は、「黙阿弥全集」にあります。県立図書館で所蔵していますので、お近くの図書館から取り寄せることができます。

参考文献；「演劇界」3月号・公演パンフレット・「黙阿弥全集」

いちにちとしょかんいん

一日図書館員ぼしゅう！

申し込める人 平塚市内に住んでいる人、または平塚市内の小学校にかよっている人

申し込むところ 一日図書館員をやりたい図書館のカウンター
(申込書を郵送してもいいです)

申し込み書 図書館と学校にあります

申し込み期間 6月19日(水)～6月25日(火) 必着

申し込みは 本人又は保護者が申し込んでください

前年参加した人が、同じ図書館に申し込むことはできません

申し込みが定員を超えた場合、抽選となります

日程及び募集人員

	1～2年生		3～4年生		5～6年生		合計
中央館	7/30 (火)	午前 6人	8/1 (木)	午前 9人	8/2 (金)	午前 12人	54人
		午後 6人		午後 9人		午後 12人	
北館	7/24 (水)	午前 4人	7/25 (木)	午前 3人	7/26 (金)	午前 4人	22人
		午後 4人		午後 3人		午後 4人	
西館	7/26 (金)	午前 6人	8/2 (金)	午前 9人	8/8 (木)	午前 12人	54人
		午後 6人		午後 9人		午後 12人	
南館	7/23 (火)	午前 6人	7/24 (水)	午前 9人	7/25 (木)	午前 12人	54人
		午後 6人		午後 9人		午後 12人	

計 184名

時間 午前 9：00～12：00

午後 13：00～16：00

その他、問い合わせは各図書館へ

中央図書館 (31)0415 北図書館 (53)1232 西図書館 (36)3555 南図書館 (21)3080